‘となりのトトロ’にみる児童の役割語とスタイルシフト ～ステレオタイプ化した言語行動～

A Study of the Role Language and Style-Shifting Phenomena of Children Speaks Seen in the Movie "My Neighbor Totoro" ～ Focusing on Stereotypic Verbal Behavior ～

髙　橋　永　行
TAKAHASHI Nagayuki

要旨

宮崎駿監督作品‘となりのトトロ’(1988）を資料として児童の役割語の特徴を考察する。役割語は現実のことばと仮想の概念上のことばとを結びつけるものである。私たちは現実世界において人とコミュニケーションをとるとき、聞き手へ配慮し、自身の話し方をその場にふさわしいスピーチスタイルから選択する。作品中で３人の児童はどのような言語行動をとると描かれているのか、アコモデーション理論を援用し、スタイルシフトの型を整理した。コミュニケーションの方法は音声言語だけではなく、言語に準じる副言語、言語から切り離された非言語行動を取り混ぜてキャラクターの個性によりシフトチェンジすることが描かれている。いずれも現実社会で共有される、ステレオタイプ化したイメージに沿っているものである。このことから作品では児童の役割語が有用に効果的に活用されていると認められる。

キーワード：役割語　スタイルシフト（Style-Shifting）　ステレオタイプ　同調（Speech Accommodation）　音位転換

はじめに

宮崎駿監督‘となりのトトロ’(1988）は、昭和30年代前半の日本を舞台にしたアニメーション作品である。都会に近い農村へ引っ越してきた一家の子ども、サツキとメイ姉妹が、子どもの時期にだけ会えるとされる不思議な生き物（トトロ）に出会うというストーリーである。子どもが主要登場人物に配置され、それぞれの人物の性格や行動が詳細かつ丁寧に描かれている。入院中の母に代わり、家事を一手に引き受ける、「努力家で聞き分けのいい」姉のサツキとは対照的に、妹のメイは幼い子に特有な、「聞き分けが悪くわがままな」性格である。近所に住むカンタは、遊びを自由に楽しむ描写がみられ、典型的な田舎の子として「素朴で純情、人見知りな」性格で、都会から来たサツキが気になるものの素直な接し方ができない。この３人の子どもたちはことば遣いについても設定年齢相応な話し方をする。キャラクターが使うことばを役割語というが、‘となりのトトロ’を資料として、児童の役割語について考察を試みる。

１．役割語と位相語

社会言語学の分野では、役割語・キャラクター語を言語行動の観点から分析、考察した研究が注目されている。言語行動は社会や文化と密接に関わるものである。位相語は現実世界の言語、役割語は仮想現実（作品世界）の言語であり、社会言語学において位相語と役割語は区別して扱う。役割語は現実の言語を鏡映しにしたものであるが、現実があるから映される。そこには現実に対して私たちが抱く共通の言語イメージが反映される。言語意識の共有は共同体社会で実際に通用することば遣いそのものだけではない。ある

種の類型化（ステレオタイプ化）がなされたキャラクターには、それにふさわしいことば遣いがある、という知識をも共有する。ここでいう言語のステレオタイプとは、「一般に広く共有されている｛こういう集団に属する人たちは普通こういう特徴を持っていてこういうことば遣いをするものだ｝という知識」に基づく。金水敏（2014）は、「ステレオタイプな知識はしばしば偏見や差別と結びつきやすく（中略）、社会的な弊害も大きいのですが、一方でなかなか排除が難しい」ことを指摘した上で、役割語はステレオタイプの長所を生かすためにあるとして、次の２点で最も効力を発揮すると述べる。

① せりふを役割語で表すと、作者の想定した人物像が読者に的確に伝わる。

② 社会に影響力のある作者が認知されていない表現を作品中で用いることで、役割語としての共通理解を促進する。

また、石黒圭（2013）は、「日本語では、現実の言語共同体に基づく言葉の違いとは別に、話し手によって創作される仮想世界の言語共同体 があります。その仮想世界は「らしさ」によって構成されます。」と述べる。役割語は「らしさ」を生み出すことばであり、「話し手の人物像を思い浮かべる手がかりになる言葉」とする。「らしさ」と「ふさわしさ」という言語意識の共有は、「現実」でのことばの具体的な様相や差異と「仮想」での個々人が持っている概念を結びつける一つの要因である。

２．アコモデーション理論（Speech Accommodation Theory）とスタイルシフト

私たちは、コミュニケーションの場においてそれを構成する、相互の人間関係や場面的要素などを無意識のうちにつかみとって使用する言語を選択する。その選択のルールは、個人的なものではなく、特定の共同体のうちに形成され、社会的に容認されたルールであるといえよう。

杉戸清樹（1992）は、社会言語の中での言語行動研究は、音声言語形式だけではなく、その形式に付属する副言語（para-language）、非言語（non-verbal）的要素から成り立つので、幅広い意味での言語行動の観点から、個人や社会において観察される言語変種の選択、コードの切り替えについて考察する必要があることを提言する[(1)]。また、村上敬一（2001）は、「コミュニケーションの行なわれる状況としての場面的要素と、コミュニケーションを行なう相手（聞き手・参加者）などの人的要素が、コード選択の要因になる」と述べる[(2)]。

話し手が使い分ける表現のスタイルは、コミュニケーションにおいてとても重要な働きをする。渋谷勝美（2008）では、スタイルを「同じ一人の話し手や書き手が、聞き手や読み手、場面、目的、メディアなどに応じて使い分けることばの多様性、レパートリーのことをいう。」と定義する。実際に使い分けることのできる「スタイルを特徴付けている言語項目（スタイルマーカー）」だけではなく、「通常は理解能力にとどまっているものの、使おうと思えば使うことのできる様々なレパートリー（潜在的レパートリー）」をも持つと指摘する。役割語については、「ひとつの言語に存在する多様性が様々な社会的意味を担うことを活用したもので、作者と読者という、日常生活を営む上では共有世界を持たない人々が、作品という共有世界に現れる架空の人物の姿を、ともに活き活きと描き出すことを可能にしている」と述べる。

スタイルシフトは一言語内での文体・話体（スタイル）の切り替えを指す。それはレジスター（言語使用域・位相）の変化により生じる。話し手が聞き手へ配慮し、自身の話し方を切り替えるスピーチ・スタイルを社会言語学的に説明する理論モデルの一つである。Giles & Ogay（2007）、栗林克匡（2010）では、話し手の言語行動の切り替えを次の３種に整理して示している。

①言語的収束（相手へあわせる　convergence）

②言語的分岐（相手に合わせない　divergence）

③言語的維持（普段の会話のスタイルのままを保つ　maintenance）

①言語的収束は、話し手が聞き手に対して親しさを示すため、聞き手の使っていることばに同調（Speech Accommodation）させ、そこに自分のことばを収束させていくという言語行動である。もともと自分と距離のある相手に対して「仲間意識」を伝えたいという意識の表れで、年配の上司が若い部下に受け入れて

もらおうとあえて若者ことばを使うなどの言語行動が典型的な例であろう。②言語的分岐と③言語的維持は①ではないという点でほとんど違いがないが、②は「自分と他者の言語的･非言語的差異を強調する（東京で大阪出身者が大阪弁で話す等）」ことで、③は「独自性を強調するわけではない」と説明される。

３．‘となりのトトロ’にみる児童の役割語（会話例の引用）

本稿で考察を試みる‘となりのトトロ’においての児童の役割語は、そのキャラクターを見る側が持つイメージとしての「らしさ」というステレオタイプを象徴するものとして使われている。サツキ、カンタ、メイそれぞれのことば遣いの特徴について、石黒圭（2013）は次のように述べる。

> 会話を見てわかるように、これだけはきはきと丁寧体で話す小学六年生はそうはいないでしょう。小学六年生はまだ十分社会性が身についていないというのが一般のステレオタイプでしょうが、サツキはそこから外れています。同じ小学六年生のカンタが、年ごろの不器用な男の子らしく、サツキに傘を差しだす時「ん、ん。」としか言えないのと対照的です。
>
> しかし、よく考えてみると、しっかり者の子どもは例外的にきちんと敬語を使って話せるというのもまた、一つのステレオタイプかもしれません。（P98-99）

この指摘を基にして３人のことば遣いの特徴について、ステレオタイプを活用した会話例を適宜作品から引用して、アコモデーション理論を援用し、児童の役割語について考えてみたい。

最初にサツキ・メイ・カンタそれぞれのキャラクター特徴を顕著に表していると考えられる場面を取り上げて、【場面１】から【場面６】までの６場面を資料として示す。

引用した会話例は、宮崎駿監督作品『となりのトトロ』（2012年７月18日発売のブルーレイ（BD））を視聴し、発話音声を書き起こしたものである。内容が確認できるように漢字仮名交じりで表記する。問いかけの「文末イントネーション」上昇調を ？ で示したが、そのほかの句読点等は記載しない。用例中の記号や下線等は筆者による。会話主体の人物名、BDのチャプター（Chapter 以下、Ｃで表す）番号、冒頭からの再生時間もあわせて示す。

【場面１】　サツキとメイが帰り道で雨宿りする場面

C10（0:44:09 ～）

サツキ　「メイ　急いで　雨ふるよ」
メイ　「うん」
サツキ　「わあっ　ふってきた」
メイ　「わっ」
サツキ　「ほら」
メイ　「メイ　泣かないよ　エライ？」
サツキ　「ん　でも困ったね」
　「お地蔵さま　ちょっと雨やどりさせてください」
カンタ　「ん　　ん」
サツキ　「あ」
カンタ　「ん」
サツキ　「でも　あっ」
メイ　「おねえちゃん　よかったね」
サツキ　「うん」
メイ　「傘　穴あいてるね」
サツキ　「ん」

【場面２】　サツキがカンタの母に傘を返しに行く場面

C11（0:46:22 ～）カンタの家で

カンタ　「だから　忘れたのっ」
カンタの母　「雨がふってる時に　傘を忘れるバカがどこにいるの」
カンタ　「いてえ」
カンタの母　「どうせ振り回して壊しちゃったんだよ」
カンタ　「ちがわい」
　「ああっ」
サツキ　「ごめんください」　← **①近づく（来訪の呼びかけ）**
カンタの母　「あらサツキさん　メイちゃんも　（奥の方に向かって）　ばあちゃん」
サツキ　「今日は　すみませんでした」　← **①近づく（相手への挨拶）**
カンタの母　「こっちこそ　お役に立てなくてねぇ」
サツキ　「あの　この傘　カンタさんが貸してくれたんです」　← **②切り出す**
カンタの母　「へえ　あの子が　　やだよ　こんなボロがさ」
サツキ　「メイもいたから　とても助かったの　← **③用件をすます**
　でもカンタさんが濡れちゃって　← **③用件をすます**
　ありがとうございました」　← **④しめくくる**

【場面３】ばあちゃんの畑で、メイがことばを言い間違える場面

C14（1:04:03 ～）

ばあちゃん　「そうかい　んじゃ　どんどん食べてもらわなくちゃ」

メイ　　「メイがとったトンモコロシ　お母さんにあげるの」 ← **音位転換**

ばあちゃん　「お母さん　きっと喜ぶよ」

メイ　　「うんっ」

【場面４】　カンタが電報をサツキに届ける場面

C14（1:04:22 ～）　ばあちゃんの畑で

カンタ　　「電報　留守だからってあずかった」

サツキ　　「私ん家？」

サツキ　　「おばあちゃん　お父さん　夕方まで帰らないの」

ばあちゃん　「開けてみな　急ぎだといけねぇから」

サツキ　　「うん」

サツキ　　「レンラクコウ　シチコクヤマ」

サツキ　　「七国山病院っ　お母さんの病院からだわ　お母さんに何かあったんだ」

サツキ　　「おばあちゃん　どうしよう　　連絡しろって」

ばあちゃん　「落ち着いて　落ち着いて　お父さんの居場所わかんのか」

サツキ　　「研究室の番号は知ってるけど　でも電話がないもん」

ばあちゃん　「カンタ　本家へ連れてってあげな　電話かしてもらえ」

カンタ　　「うん」

ばあちゃん　「メイちゃんはここにいな」

サツキ　　「メイ　おばあちゃんとこにいな」

【場面５】C15（1:07:10 ～）　メイがサツキを探す場面

メイ　　「おねえちゃーん　　はっ」

ヤギ　（鳴き声）

メイ　　「だめだよ　これ　お母さんのトーモロコシだよ」 ← **音位転換しない**

ヤギ　（鳴き声）

メイ　　「だめだもんっ　お母さんにあげるんだもん」

【場面６】C16（1:12:04 ～）姿が見えなくなったメイを探す場面

サツキ　「すいません　おじさん　あの」　← **①近づく**
農夫　「え？」
サツキ　「この道を　小さな女の子が通らなかったですか？　← **③用件をすます**
　私の妹なの」
農夫　「さあてねぇ　女の子？　見たら気がついただろうけどなあ」
サツキ　「こっちじゃないのかしら？」
農夫　「たしかにこっちへ来たのかい？」
サツキ　「わからないの」

（1:13:14 ～）
サツキ　「止まってくださーい」　← **①近づく**
若い男性「ばっかやろー　危ねぇっ」
サツキ　「妹を捜してるんですっ　← **②切り出す**
　女の子　見ませんでしたか？」← **③用件をすます**
若い女性「妹さん？」
サツキ　「七国山病院へ行ったらしいの　４歳の女の子です」
若い男性「りょうこちゃん　気がついた？」
若い女性「ううん　私たちね　七国山から来たの　けど　そういう子は見なかったわよ」
サツキ　「そう　ありがとう」　← **④しめくくる**
若い男性「おまえ　どこから来たの？」
サツキ　「松郷です」
若い男性「まつごうっ？」
若い女　「ああ何かの間違いじゃない？」
サツキ　「　（無言）　」　← **返答しない（⑤離れる）**
若い男　「じゃあな」

（1:14:04 ～）
カンタ　「サツキーッ」
サツキ　「カンちゃーん　いた？」
カンタ　「だめだ　こっちも？」
サツキ　「うん」
カンタ　「今　父ちゃんたちが捜してる」
カンタ　「おれ　かわりに七国山へ行ってやるから　おまえは家に戻れ」
サツキ　「メイは病院へ行こうとして途中で道を間違えたのよ　きっと」
カンタ　「さっき神池でサンダルが見つかったんだ」
サツキ　「はっ」（駆け出す）
カンタ　「まだメイの物って決まってないぞ」

４．サツキとカンタのコミュニケーション

【場面１】は学校からの帰り道､お地蔵さんの祀られているところでサツキとメイが雨宿りをしていると、通りかかったカンタが自分の差している傘をサツキに貸す場面である。

サツキと同じ小学六年生のカンタは、年ごろの不器用な男の子らしく、サツキに傘を差しだすとき､「んん」としか言えない。しかし、【場面２】では、ちゃんと普段通りに母と会話する。つまり、相手との心的距離によって〈話さない／話す（うまく会話ができない／自然と会話ができる)〉という言語行動の切り替えがみられる。

一方、サツキは【場面１】と【場面２】を通してみられるように、相手や状況に応じて「丁寧さの度合い」が違うことば遣いをする。つまり、場面的要素と人的要素との関連でスタイルシフトを実現させている。まず【場面２】でサツキのコミュニケーションの方法を観察してみよう。

中学生向け国語辞典として編纂された『例解国語辞典』（第八版　三省堂　2012）巻末に記載された「ことばによる人とのふれあい　－話しことばと書きことば」では場面ごとのコミュニケーション例を整理して示している。４場面を５段階（①近づく　②切り出す　③用件をすます　④しめくくる　⑤離れる）に分けて事例を説明する。この事例の分類に沿ってサツキが相手とどんな接触方法で言語行動を実現しているか、検討していく。

【場面２】は、サツキとメイがカンタの母に傘を返しに訪問する場面である。ここでは、会話例右側に表示したように、①から④までの段階が描かれている。その後、映像がカンタとばあちゃんに切り替わるので、⑤は作品中に描かれていない。

サツキの会話例で①～④をあてはめると、次のようになる。

①近づく（呼びかけ）「ごめんください」（挨拶）「今日は　すみませんでした」[3]

②切り出す 「あの　この傘　カンタさんが貸してくれたんです」

③用件をすます「メイもいたから　とても助かったの　でもカンタさんが濡れちゃって」

④しめくくる「ありがとうございました」

貸した傘がぼろだったことに恥ずかしさを口にしたカンタの母に対して、カンタが濡れてしまって申し訳ないという気持ちを伝えて、困っていた状況を解決できたお礼をまた重ねて伝える。尊敬語・謙譲語・丁重語を選んで使うことはないが、きちんと相手に配慮したコミュニケーションをとっているといえるだろう。石黒圭（2013）での「はきはきと丁寧体で話す小学六年生」という指摘の通りである。

【場面４】は、母が入院している病院から届いた電報を受け取る場面である。ここでは一転して小学生高学年の女の子「らしい」の話しぶり（くだけた、若者語、女性語）がみられる（私ん家？／お母さんの病院からだわ／電話がないもん／おばあちゃんとこにいな)。カンタのおばあちゃんとはかなり親しくなっていることがうかがえる。

【場面６】は、メイの姿がみえないことに気づき、探し回る途中で出会った人たちにメイの消息を尋ねる場面である。最初に尋ねる農夫に対しては、②（近づく）と④（しめくくる）が抜けているが、次に出会ったトラクターに乗った男女に対しては①から⑤までそろっている。⑤（離れる）については無言で応対する。作品の映像からは、「七国山から来たの　けど　そういう子は見なかった」という女性の返答にことばが出ないほどショックを受けている様子がサツキの表情から確認できるので、無言ではあるが⑤に相当する言語行動とみるべきであろう[4]。気が動転し、焦っているのにしっかりと「コミュニケーションの段階」を踏んで会話する様子が描かれている。きちんと敬語を使って話せるというよりは、場面的要素と人的要素との関連でスタイルシフトを実現させている。

また、カンタについては、【場面１】と異なり、口べたな男の子ではなく、いざというときに頼れるしっかりとした男の子「らしい」話し方が描かれている（「オレ　かわりに七国山へ行ってやるから　おまえは家に戻れ」、「まだメイの物って決まってないぞ」)。

５．メイの言語特徴

メイは人見知りする幼児なので、慣れた相手には普段通りに話をするようになるが、初対面に近い相手にはほとんど何も話さない。対人距離の要素が強く関わっている。【場面２】では、訪問時にカンタの母から「あらサツキさん　メイちゃんも」と話しかけられても挨拶を返さない。【場面３】は、カンタのおばあちゃんの畑で野菜を収穫したあとの場面である。ここではふつうにメイとおばあちゃんの間で会話ができている。会話が〈できる／できない〉ということがスタイルシフトである。

また、メイには幼児語にみられる、言い間違いをするという典型的な音声特徴がみられる。幼児期の特徴のひとつとして、音位転換（２文字ずつを１単位とする音連続の言いやすさから適用されたルール）があり、汎用的な典型例として「エレベーター→エベレーター、おくすり→オスクリ」があげられる。特定の単語に間違いが集中し､不自然で苦手な音連続があるのが幼児の特徴である｡【場面３】で｢トーモロコシ」を「トンモコロシ」と言い間違える。他にC7（0:27:40 ～）の、父と留守番中に庭で一人遊ぶ場面でも「オタマジャクシ」を「オジャマタクシ」と言い間違える。

岡﨑友子・南侑里（2011）では、役割語としてみる「幼児語」における音声特徴を、①省略　②置換　③付加･倒置　に３分類する。｢③付加･倒置について、マンガでの使用例は少なく、特に付加はほとんど見いだせなかった｡」と述べ､｢個別的な現象で規則性があるものではない｡」とする[(5)]。寺尾康（2006）では、寺尾氏が1998年と2002年に発表した「連続する２モーラという環境で起こる実験結果」を振り返り、「幼児の誤りには音位転倒が音代用に優るとも劣らぬほど頻繁に現れ、しかも、決まった語彙に集中して生じる」例として、「トウモコロシ（とうもろこし）」を挙げ、「幼児には「苦手な」２モーラ連続がある」と述べる。「２モーラ連続を単位とする「調音のし易さ」や「調音の自然さ」」を音位転倒の生じる要因として指摘する。また、窪薗晴夫（1998）は、音韻的な長さの単位としてのモーラという概念は、「２モーラがひとつのまとまりとなって振る舞う」というフット（foot）の概念で一般化できると説明する[(6)]。

‘となりのトトロ’では、２モーラ（foot）の音の長さの単位で自身のしやすい発音に置き換えるという幼児特有の言い間違いとして、メイの会話中に使わせていると考えられる。「トーモロコシ」をフットの単位で分けると「トー・モロ・コシ」になるが、「トンモコロシ」という形式は「トー」が「トン」に置き換わり、「モロ」が「モコ」に、「コシ」が「ロシ」に音が転倒する。「モロ＋コシ」より「モコ＋ロシ」のフット（２音連続）の方が発音しやすい児童が多いという現象が現実社会に見られる。この現象を作品では役割語として利用している。

幼児は特定の単語をときに言い間違えることもあるし、また正しく言えたりすることもあるということは現実にはない。間違えたまま使い続けるのが現実の現象である。メイは、【場面３】では「メイがとったトンモコロシ　お母さんにあげるの」と言い間違えるが、サツキからはぐれたメイが道でヤギに出くわす【場面５】では､ヤギに向かって「だめだよ　これ　お母さんのトーモロコシだよ」と正しい語形で「とうもろこし」を発音している。

トンモコロシとまちがった発音をしないのは、ヤギに対するセリフであると同時に視聴者に向けてのものであると考えられる。ここでは「トンモコロシ」という言い間違いをさせる必要がなく、むしろ正しい発音の単語を用いることでシナリオのつながりを視聴者に想起させる効果があるシーンである｡そのあと、メイの姿が見えなくなった場面で、サツキは「あの子…　お母さんの病院に行ったんじゃないかしら…」というセリフを口にする。メイの｢お母さんのトーモロコシだよ｣というセリフをもとにして､視聴者は｢メイはとうもろこしをお母さんにあげるために七国山病院へ行ったらしいとサツキが判断したと印象づけるために使われていると考えられる。メイが普段から正しく「トーモロコシ」と発音できるのなら【場面３】でメイが「トンモコロシ」と言い間違えることはない。「幼児には音位転倒がある」という共通イメージを【場面３】において役割語として活用したとみなせる。前述したように､作品中のメイの言い間違いは、「トンモコロシ」と「オジャマタクシ」の２例だけが観察される。

６．３人のスタイルシフトの型

３人の役割語をスタイルシフトの型により整理してみよう。

草壁サツキは12歳の小学６年生で、入院中の母に代わり家事をこなし、妹の面倒を見るしっかりした女の子という設定である。

話し方の特徴として次の３点が挙げられる。

1）相手との距離や場面状況に応じて使い分けができる。

2）はきはきとした丁寧体が使える。

3）コミュニケーションをとるうえで話題の組み立て方が論理的である。

言語行動からみると、相手との距離感をはかって「丁寧体／普通体」を適切に切り替えることができるといえるだろう。

ことばの切り替え型は、〈丁寧／普段づかい〉であり、配慮表現をパターン化しているともいえる。

大垣勘太（カンタ）はサツキの同級生で、純情、恥ずかしがり屋であるが、家の仕事をよく手伝い、サツキに傘を貸すなど心優しい純朴な少年という設定である。

話し方の特徴は次の３点が挙げられる。

1）口べたである。

2）年ごろの不器用な男の子らしく、気になる女の子に最初はほとんど口がきけない。

3）家族と話すときは、普段通りのことばがすぐに出てくる。

ことばの切り替え型は、〈無口／普段づかい（話さない／話す）〉である。

草壁メイはサツキの妹で、未就園の４歳児である。好奇心が強く、観察好きで、姉と対照的な性格という設定である。

話し方の特徴は次の３点が挙げられる。

1）慣れていない相手に対して無口になる（人見知り）。

2）慣れてくると普段通りのことば遣いをするようになる。

3）幼児特有の言い間違いがみられる。

ことばの切り替え型は〈無口／普段づかい（話せない／話す）である。

むすび

人は、話し方のスタイルを複数持ち、場面状況や相手との距離（対人距離）の違いにより聞き手に合わせたことば遣い、「ふさわしい」スタイルを選択する。「大人になる」ということは、そのスタイルを身につけることにほかならない。児童は社会通念上まだスタイルを身につけていないということがわれわれの共通認識である。カンタとメイは、対人距離によりことばを使って切り替えることはしない（または、できない）。アコモデーション（相手にあわせて自身のことばを収束する行動）を使えるのはサツキだけである。これは、「しっかり者の小学生高学年の女の子は大人ともきちんと対話ができる」という現実社会で共有されるステレオタイプとして描かれていると考えられる。

サツキは、しっかりと敬語を使いこなすというよりはむしろ、きちんとコミュニケーションの手順に従って会話を展開させていくので、「小学生なのにしっかりとした女の子」という印象を見る側に与える。また、メイには幼児語の典型とされる言い間違いを見る側に意識させるような場面が与えられている。主役の二人、サツキとメイには、キャラクター設定に合わせた役割語の効果を十分に活用させたセリフが用意されていることがうかがえる。そして、カンタには、口べたの田舎の男の子という印象を見る側に最初に持たせておいてから、終盤では「頼りになる男の子」としてしっかりとしたセリフが用意されている。

見る側（一般社会）が共有するイメージに沿った役割語を最大限に活用した作品であるといえるだろう。そしてメイもカンタもサツキと同じようにいずれスタイルを身につけ、大人になるのだろうと予感させるとも考えられる。

注

注１　杉戸（1992）では、「場面的要素とは、場所・場所柄・事態・状況などの空間的条件、時間・時刻・時代などの時間的条件、どんな媒体や接触方法で言語行動を実現するかという媒体の条件、その状況が参加者に与える心理的条件などが中心となる。場所柄や状況というなかに、話し相手や聞き手という人の要素もかかわる。」また「人的要素とは、その言語行動の主体、相手、話題の登場人物、わきにいる間接的な聴衆などであり、それらの人の生得的（性・年齢など）、社会的（出身地・居住地・職業・学歴・階層・地位など）、心理的（性格・志向性・その場での心理状態など）な諸側面でとらえた属性や、年齢や階層･地位などから見た上下関係、つきあいの程度に代表される相互の親疎関係、役割や立場の関係、など人的要素の間のいろいろな相互関係が問題とされる」と説明する。

注２　ここで言う「コード選択」はスタイルシフトと同義と考えられる。コードスイッチングは複数の異なる言語体系（異言語・方言）間での使用言語の切り替え（言語システムそのものの切り替え）を指すのが一般的である。

注３　日中メイを預かってもらっていたのに、メイが泣き出して迷惑をかけたことへの謝罪のことば。

注４　杉戸清樹（1992）などでは、表情は副言語（para-language）的行動の一つとされる。

注５　実際の幼児語と区別するため、役割語の場合には「幼児語」と「」付きで示すと述べる。

注６　窪薗晴夫（1998）では、伊藤友彦・辰巳格（1997）で述べられた「仮名文字習得前の子どもでもすでにモーラ意識を持っている」をもとに「日本語話者にとってモーラという単位は比較的理解しやすい」と結論づけている。

引用資料一覧

宮崎 駿 監督作品『となりのトトロ』［Blu-ray］　販売元:ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン　発売日 2012/07/18　収録時間: 86分

参考文献一覧

金水敏編（2007）『役割語研究の地平』くろしお出版

金水敏（2014）『〈役割語〉小辞典』研究社

金水敏（2019）「アニメキャラクターの言葉」田中牧郎編『現代の語彙］－男女平等の時代－』（シリーズ〈日本語の語彙〉７　第２部　メディアによる語彙の創造と広がり　第六章）朝倉書店

福田一雄（2013）『対人関係の言語学　－ポライトネスからの眺め－』開拓社

石黒圭（2013）『日本語は「空気」が決める　社会言語学入門』光文社新書643

杉戸清樹（1992）「言語行動」『社会言語学』（真田信治、渋谷勝己、陣内正敬、杉戸清樹著）桜楓社

杉戸清樹・尾崎喜光（1997）「待遇表現の広がりとその意識　－中高生の自称表現を中心に」『月刊言語　特集 ポライトネスの言語学 敬語行動の今を探る』26-6　大修館書店

村上敬一（2001）「コード選択と言語使用」『応用社会言語学を学ぶ人のために』（ダニエル･ロング､中井精一、宮治弘明編）世界思想社

川村陽子（1998）「対人コミュニケーションにおけるポライトネスの諸相」『人間と環境－人間環境学研究所研究報告』２ 岡崎学園国際短期大学人間環境学研究所

山本もと子（2004）「社会的相互行為としての謝罪表現　－言語表現選択の背景には何があるのか－」『信州大学留学生センター紀要５』

大津友美（2007）「会話における冗談のコミュニケーション特徴　－スタイルシフトによる冗談の場合－」『社会言語科学』10-1

渋谷勝美（2008）「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『月刊言語　特集 日本語のスタイル　その使い分けと創造性』Vol.37･No.1 大修館書店

栗林克匡（2010）「社会心理学におけるコミュニケーション・アコモデーション 理論の応用」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』47,pp.11-21

Giles, Howard; Ogay, Tania（2007）. "Communication Accommodation Theory". In Whaley, Bryan B.; Samter, Wendy（eds.）. Explaining Communication: Contemporary Theories and Exemplars. ahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

金田純平･澤田浩子･定延利之（2008）「コミュニケーション・文法とキャラクタの関わり」『月刊言語　特集　日本語のスタイル　その使い分けと創造性』Vol.37・No.1 大修館書店

岡﨑友子･南侑里（2011）「役割語としての『幼児語』とその周辺」金水敏編（2011）『役割語研究の展開』くろしお出版

伊藤友彦・辰巳格（1997）「特殊拍に対するメタ言語知識の発達」『音声言語医学38』

窪薗晴夫（1998）「モーラと音節の普遍性」『音声研究』2-1

寺尾康（2006）「言語産出メカニズムの連続性について　－言い間違いからみた言語発達－」『ことばと文化９』静岡県立大学英米文化研究室

髙橋永行（2015）「方言に対する社会共有イメージとステレオタイプの形成　～松本清張『砂の器』、氷室冴子『海がきこえる』を資料として～」『米澤國語國文』45　山形県立米沢女子短期大学国語国文学会

高橋永行（2018）「‘風の谷のナウシカ’にみる、登場人物の話体　～対人間関係における言語行動～」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』45